Osaka University Knowledge Archive

Title	アート理解，それは経験が尺度となる ： ファーレ立川と東京ミッドタウンのパブリックアートを中心に
Author(s)	神蔵，理恵子
Citation	デザイン理論. 2008, 52, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53587
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

アート理解，それは経験が尺度となる
── ファーレ立川と東京ミッドタウンのパブリックアートを中心に ──

神蔵理恵子／京都工芸繊維大学大学院

発表のタイトルに示されている「アート」とは，具体的には「パブリックアート」を指し，発表では，いくつかの事例に基づいて，都市生活を営む者にとってのパブリックアートの意義を考えていくこととする。調査対象地にファーレ立川と東京ミッドタウンを選択する。その理由は，1994年に竣工したファーレ立川はパブリックアートの存在意義を明解に打ち出した日本における最初のプロジェクトであり，そこから10年あまりの歳月を経た今日，パブリックアートの存在意義がどのように展開してきたのかが，2007年３月東京・六本木に生まれた東京ミッドタウンのプロジェクトとの比較を通して明らかになると考えるからである。

1994年，立川市の都市再開発計画にあたり現代アートの設置が利用されて以来，都心では次々と，都市の再生計画や公共空間の改善にあたってパブリックアートに何らかの効能を期待する試みがなされている。パブリックアートの設置は，税金の無駄遣いであるという批判を受けてはきたが，それでもなお，作品の数は増え，我々が日常の生活空間においてアートに触れる機会は増えた。本発表のタイトルに示される「経験」とは，パブリックアートに触れるこのような機会のことを指す。経験とは，『広辞苑第五版』によると，「㋐外的あるいは内的な現実との直接的接触。㋑認識として未だ組織化されていない，事実の直接的把握。㋒何事かに直接ぶつかる場合，それらが何らかの意味で自己を豊かにするという意味を含むこと。㋓何事かに直接にぶつかり，そこから技能・知識を得ること。」を意味する。本発表では，「経験」という言葉のこのような意味のなかでも，特に，何事かに直接ぶつかったり直接的に接触したりし，そのような直接性をとおして自己を豊かにすることを重視したい。パブリックアートの数が増した今日，パブリックアートとそれを受容する我々との関係に目を向け，アートの経験という視点から，パブリックアートのありようと存在意義を改めて省みる必要があるように思われる。

ファーレ立川および東京ミッドタウンでは，いずれも都市の再開発に伴いパブリックアートの利用が積極的に取り入れられている。このような都市再開発において，パブリックアートがどのようなメカニズムで都市に貢献するかについて，その一端をあきらかにすべく，調査と分析をおこなった。結果として次の４点を明らかにすることができた。

1）どちらの地域も，作品が都市生活において邪魔な存在にならないように，作品に機能をもたせることで，都市におけるパブリックアートの存在理由の一つを明確にしている。

2）だが，都市生活に役立つ実用的機能が際だってしまい，アートとしての存在意義が見えなくなってしまった作品ある。都市における実用的機能を強調すればするほど，却ってそのアートとしての意味が希薄になるという問題点がある。

3）作品においては，モニュメント志向がまだ抜けきっておらず，実用的機能は極めて付随的であり，実用的機能とアートの融合

が，単なるスローガンに終わっているものがある。

4）国際的に活躍するアーティストの作品が普段の生活空間に取り込まれている。

以上の結果をふまえたうえで，さらに次のことが明らかにされなければならないだろう。1997年10月にオープンしたファーレ立川と，2007年３月にオープンした東京ミッドタウンという，約10年の隔たりのある二つのプロジェクトの間で，都市開発にパブリックアートを利用する仕方をめぐってどのような変化がみられるであろうか？　1994年の北川フラムの試み以来，作品に実用的機能をもたせることは，都市にパブリックアートを設置する際に必要なコンセプトとみなされてきた。しかし，実際，実用的機能とアートとしての意義の両方が明確な作品の数は減ってきている。特に東京ミッドタウンにおいては，それがストリートファーニチャーなのか，それとも機能を持ったアートなのか，みる者が各々の経験に基づいて判断しなければならない作品が多くみられた。我々が，作品がもつアートとしての意義を理解するためには，まず，これがアートであるという認識に基づいてその作品に接しなければならないように思われる。

アートがアートとしての普遍的な意味をもたず，それをアートとみなして興味をもった人にだけ，その意味が理解される。それは，悲しいことのように思えるかもしれない。だが，現代という時代においては，パブリックアートとして設置された作品が実際にあり，アートに接する機会が常に準備されていることが，まず大切となっているように思われる。はじめは，パブリックアアートの本来の意味を理解してなくとも，日常においてそれに常に触れ，そうした経験を重ねていくうちに，別の場所で同じようなものに遭遇した時に，いつも見ていたあれはアートだったのだと気づく。そのときに，作品のアートとしての意味がはじめて理解できるようになったとしても，それは遅すぎはしない。

パブリックアートは，そのアートとしての意味に目を向けようとしない人にとっては，単なる物体であるか，あるいはなんらかの実用的な機能を果たすためのものに過ぎないだろう。だが，パブリックアートは，ものごとのこれまでには見えていなかった側面へと人々の意識を方向づけ，人間に新しい思考回路を与えるきっかけとなる可能性を常に秘めているものである。いずれにしろ，それをアートであるとみなすことができるかどうか，また，そのアートとしての意味が理解できるか否かは，みるものが，日常の中でどのくらいそれらに触れ，それらに親しんできたのかという，みるものの経験の度合いが尺度となる。アートを理解する上で，経験を積み重ねることは不可欠のことであるように思われる。経験を重ねるためには，まず，日常空間に作品が設置されていなければならない。パブリックアートに馴染みのないものにとって，ともすれば作品は，邪魔な存在，あるいは公害のように都市に蔓延するものに感じられかねない。したがって，即座に邪魔なものとみなされてしまわないために，パブリックアートに，なんらかの実用的な機能を併せもたせることは，今後しばらくの間は必要なこととなるであろう。そうして，パブリックアートが，常に，それがアートであるということを意識するための機会を我々に与え続け，我々の経験を広げ，豊かにするためのきっかけとしてそこに存在していることは，非常に重要なことだと結論づけることができる。